

ウィトゲンシュタインの確実性について —ムーアの「外的世界の証明」についてのウィトゲンシュタインの 批判と評価—

橋本 哲

1 はじめに

ウィトゲンシュタインが晩年に関心を持った問題の一つに確実性に関するものがあつた。『確実性について (*On Certainty*)』(以下『OC』と表示する。)は、彼が1951年4月29日に亡くなる約1年半前から亡くなる前々日の4月27日までに書き留めた短い断章からなる草稿である⁽¹⁾。

『OC』の編集者であるアンスコムとウリクトによれば、この草稿は、ウィトゲンシュタインが1949年半ばにノーマン・マルコム(Norman Malcolm)の招きを受けてアメリカを訪れた際に、マルコムに刺激されて、ムーアの1925年の論文「常識の擁護 (*A Defence of Common Sense*)」(以下「擁護」と表示する。)と1939年の論文「外的世界の証明 (*Proof of an External World*)」(以下「証明」と表示する。)を検討して書かれたものである。

『OC』では、「知っている」、「疑う」、「信じている」、「確実性」等の語の用法や言語ゲームの基盤等が考察されているが、本稿では特に、ムーアの「証明」に対するウィトゲンシュタインの批判と評価を中心に検討していく。そのため、初めにムーアの「証明」の概略を辿り、次いでそれに対するウィトゲンシュタインの批判と評価について、アヴラム・ストロール (*Avrum Stroll*) の『確実性に関するムーアとウィトゲンシュタイン (*Moore and Wittgenstein on Certainty*)』を参考にして考察を進める。

2 ムーアの「外的世界の証明」について

(1) ムーアの外的事物について

ムーアは、論文「証明」の中で、観念論、懐疑論を論駁して実在論を擁護するために、「物理的対象が存在する」ことをどのように証明をすればよいかを考える。ムーアが考える「外的事物 (物理的対象)」とは、「我々の心の外にあるもの」で「空間に

において出会われるもの」のことである⁽²⁾。そして例えば、「少なくとも一つの星が存在する」ことが証明されれば、空間において出会われる少なくとも一つのもの（星）が存在するということであり、我々の心の外に存在するものがあるということになり、従って外的事物が存在することが証明される、と考える。

では、何であれ、外的事物が存在するということを、ムーアはどのようにして証明するのか。

(2) ムーアの「外的世界の証明」について

ムーアは外的事物が存在する例として、「二つの人間の手が存在する」ことが証明できると言う。どのようにしてか。ムーアは次のようにしてそれを証明する。

私は両手を挙げ、右手であるジェスチャーをしながら「ここに一つの手がある（存在する）」と言い、次いで左手であるジェスチャーをしながら「また、ここにもう一つの手がある（存在する）」と言う。こうすることによって、私が正にその事実によって外的事物の存在を証明したということであるなら、今や私は、他の多くの仕方ですれ [外的事物の存在] を証明することができることをあなたは見て取ることだろう⁽³⁾。

このようにしてムーアは、外的事物が存在することを証明したと考えるのである。

(3) ムーアの「外的世界の証明」に対する異論と それに対するムーアの応答⁽⁴⁾

しかしムーアはまた、自分のこの証明に満足しない哲学者達が多くいるだろうということも認めていた。彼らは、ムーアが自分の手を眼前に掲げて「ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある」と言う時、ムーアがその証明の前提にしている「ここに手がある」こと自体の証明を求めるのである。そして彼らは、ムーアにその証明ができないのなら、ムーアはそれを知らないと考え、ムーアがした証明は決定的な証明ではない、と批判するのである。

これに対してムーアは、「証明」の中で次のように応答する。

「ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある」ことを、今や私はどのようにして証明すべきなのか。私にはそれができるとは思われない。[略] 私は、証明することができないものごとを知っている。そして、たとえ（私が思うように）それを証明することができなくても、私が確かに知っているものごとの中には、私が証明の前提にしているもの [「ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある」] がある。それ故、私は次のように言いたい。もし誰かが、私とその前提を知らない [証明できない] という理由だけでこの証明に満足しないなら、彼らは自分達の不満について納得のいく理由を持っていないのだ、と。

このようにムーアは、自分の証明が前提にしている「ここに一つの手がある」ことを証明することはできないが、自分は確かに「ここに一つの手があることを知っている」、と言うのである。

以上が、ムーアの「証明」の概略である。

この結論と同じものが、『OC』の冒頭の第1節の中にある。

もしあなたが、ここに一つの手があることを知っているのなら、残りの全てについてあなたを認めよう⁶⁾。

では、ウィトゲンシュタインは、ムーアの証明の何を批判し、何を評価したのか、それらについて、アヴラム・ストロールの解釈を下敷きにして考察する。

3 ムーアの「外的世界の証明」についてのウィトゲンシュタインの批判と評価⁶⁾

(1) ムーアの証明の奇妙さについて

ムーアは、1925年の「擁護」では、そこに掲げる常識について自分は確信を持つ

で知っている」と単に主張するだけで、そのことを証明しようとはしなかった。

なお、ムーアが「擁護」において確信を持って知っている」と主張する常識とは、「今生きている身体が存在し、それは私の身体である」、「私の身体は生まれて以来ずっと地球の表面に接しているか、またはそれほど離れずにいる」、「地球は私の身体が生まれる以前から何年も存在してきた」等⁽⁷⁾の命題のことである。

しかし、後の1939年の「証明」では、ムーアはまさに「物理的対象（外的世界）が存在する」ことを証明しようとした。

ストロールによれば、ムーアが証明を試みたところに、ウィトゲンシュタインがムーアの論文を考察する気にさせるものがあったという。そしてウィトゲンシュタインは、ムーアの証明には奇妙なところがあり、また、証明自体は誤っていると考えたが、同時にそこに、哲学的に理解できる重要な考えがあるという洞察を得た。そのプロセスが『OC』なのだ、というのである。

では、ウィトゲンシュタインが、ムーアの証明には奇妙なところがあるとしたもの、また、その証明は誤っているとしたもの、そしてそれにもかかわらずその証明の背後には、何か理解できる重要な考えがあると洞察したもの、それらは何であったのか。

ウィトゲンシュタインがムーアの証明に向ける批判にはいくつかあるが、ストロールは主に次の三点を取り上げる。

第一に、ムーアは、「ここに私の手がある（存在する）」という言明と「ある惑星が存在する」という言明との間に大きな違いがあることを理解していないこと。

第二に、「物理的対象は存在しない」はナンセンス（理解不可能）であり、従って「物理的対象は存在する」もナンセンスであるということ。

第三に、ムーアの証明はナンセンスであり誤っているが、その背後には理解できる重要な考えがあるということ。

以下、それぞれについて取り上げていこう。

(2) 第一、「ここに私の手がある（存在する）」という言明と「ある惑星が存在する」という言明との間に大きな違いがあることについて

ストロールは次の『OC』第20節を引用してこの議論を始める。

「外的世界の存在を疑う」ことは、後の観察を通じて立証されるようなものの存在、例えば惑星の存在を疑うことを意味しない。——あるいはムーアは、ここに自分の手があることを知っているということは、土星という惑星が存在することを知っているということとは違った種類のものだと言いたいのだろうか。そうでなければ、土星という惑星が発見されていることを懐疑論者達に指摘して、土星の存在が証明されているのだから外的世界の存在も証明されている、とすることは可能であろう。

ウィトゲンシュタインの断章は、他の著作（草稿）でもそうだがこの節も同様に分かりにくい。ストロールによれば、ウィトゲンシュタインはここで、次の3つを比較することを求めているという。

- i ある惑星が存在するかどうかという疑い
- ii 私の手がある（存在する）かどうかという疑い
- iii 外的世界が存在するかどうかという疑い

ストロールは、ムーアの関心の焦点はiiとiiiにあり、彼の証明は、iiを前提としてiiiを結論とするものであるが、その目的はiiとiiiの区別が不鮮明なことを懐疑論者達に対して説得しようとするものである、と言う。「結局、彼は、自分の手の存在を疑うことと外的世界の存在を疑うこととの間に区別の無いことを説き伏せようとしている」⁽⁸⁾、と。

しかしストロールによれば、ウィトゲンシュタインはこの節で、ムーアがiiとiiiを同化させているというよりは、iiをiに同化させている可能性のあることを問題視しているという。iiがiに同化されるなら、ムーアの証明は奇妙なものとして映ると。また、iiをiに同化させてiiiを導くということでは観念論や懐疑論の異議に十分に答えられない、ということを指摘したがっているように見える、と。これはどういうことだろうか。

まず、iiがiに同化されるのなら、ムーアの証明は奇妙なものとして映るとはどういうことだろうか。

「ある惑星が存在するかどうかという疑い」と「私の手がある（存在する）かどうかという疑い」を比較すると、「ある惑星」と「私の手」に違いがあるだけで、この二つの表現に大した違いはないように見える。しかし、ウィトゲンシュタインは、この二つの疑いにはとても大きな違いがあると言うのである。

「惑星」に関して言えば、実際、天文学の歴史の中で「ある惑星が存在するかどうか」の議論がなされ、新たな惑星が発見されたこともあれば、惑星の存在の可能性が否定されたこともあった⁹⁾。

しかし、「私の手がある（存在する）かどうか」について議論がなされるということがあるかどうか、また、過去にあったかどうか。「ムーアが生まれて以後、どういう時にせよ、ムーア自身を含めて様々な人がムーアの手が存在することを疑うようなことがあったらどうか。」⁽¹⁰⁾ ムーア自身にしても、自分の手の存在を、証明する前でも後でも疑うことはなかったはずだ。

しかしムーアは、惑星の存在ではなくて、「ここに私の手がある（存在する）」ことを証明しようとした。ウィトゲンシュタインは、ここにムーアの証明の奇妙さを見出したのである。「惑星が存在する」と違って、「ここに私の手がある」ことは、証明されたから理解されるというものではない。それは証明される以前からあたりまえのことである。だからそれを証明しようとするのが奇妙なのだ。

次に、ii を i に同化させて iii を導こうとするムーアの証明は、観念論や懐疑論の異議に十分に答えられない、とはどういうことだろうか。

先に引用した『OC』の第 20 節で、ウィトゲンシュタインは、『『外的世界の存在を疑う』ことは、後の観察を通じて立証されるようなものの存在、例えば惑星の存在を疑うことを意味しない』、と言っていた。この意味は、ストロールによれば、観念論者達が立てる外的世界の存在についての疑いは、土星の存在を疑うこととは異なった特殊なものであり、明らかに哲学的な疑いだ、というものである。それは、何か事実の発見や証拠をあげることによって立証されるような存在を疑うものではない、と。

しかしムーアは、i と ii の間に大きな違いがあることを見損なって、惑星の存在も自分の手の存在も同じようなのだと考えて、誰も疑うことがない自分の手を取り上げて、その手の存在を証明することによって、iii の外的世界の存在を証明しようとした。

ストロールは、この証拠を挙げて外的世界の存在を証明しようとした点で、ムーアは伝統的な観念論者の疑いがどんなに特殊なものであるかを理解し損なっており、ムーアの試みた証明が反対論者の異議に答えることにはなっていないと言う。そして、観念論者の疑いが通常の疑いではないことについて、次の『OC』の第24節を引用する。

観念論者の問いは次のようなものであろう。「どんな正当性がある私、私の手の存在を疑わないのか。」(そしてその間に対する答えが、「私はそれらが存在することを知っている」ということではあり得ない。)しかし、そのように問う者は、存在についての疑いが言語ゲームの中でのみ働くものだという事実を見落としている。従ってまず問われるべきは、そのような疑いはどのようなものかということであって、早まってそれを理解してはならない。

ここでウィトゲンシュタインは、「存在についての疑いが言語ゲームの中でのみ働くものだという事実」に注意を向けさせる。通常の言語ゲームで存在についての疑いとは、例えばペンケースの中にあるはずのボールペンがないのはどこかで落としたのか等というものであって、ボールペン自体の存在を疑うものではない。そういう疑いは除かれている。通常の言語ゲームでは疑いはどこかで打ち止まる。(『OC』§56)

「自分の手が存在する」も、通常の言語ゲームでは疑いが除かれているものの一つである。それにも拘らず自分の手が存在する根拠を尋ねる観念論者にどう応じるべきか、ウィトゲンシュタインは答えている。それは、根拠を見出すことができなくてあれこれ悩んだ挙句に「とにかく私は自分の手が存在していることを知っている」などと答えることではない。そうではなくて、観念論者の問う疑いがどういう疑いか観念論者に問い質すことである、と。

次に、ウィトゲンシュタインがムーアの証明に向ける批判の第二、「物理的対象は存在しない」はナンセンス(理解不可能)であり、従って「物理的対象は存在する」もナンセンスであるということについて検討しよう。

(3) 第二、「物理的対象は存在しない」はナンセンスであり、従って「物理的対象は存在する」もナンセンスであるということについて

ストロールは『OC』の第35節を取り上げる。

しかし人は、いかなる物体も存在しないことを想像することができないのではないか。私には分からない。しかしまた、「物理的対象は存在する」はナンセンス (Unsinn, nonsense) である。これは一つの経験命題であるのだろうか。——また、「物理的対象が存在しているように見える」という、これは経験命題であろうか。

ストロールはこの節を理解するために、次のように問いを進める。

「いかなる物体も存在しない」ということは、地球を含めたいかなる天体も存在しないということである。地球が存在しないということは、人間も存在しないということである。では、「我々は如何にしてその誤りを発見しうるのか」という問は何を意味するのだろうか。物理的対象が存在せず、それ故我々も存在しないとすると、この問は空虚であり意味はないのではないか。そうすると「物理的対象は存在しない(いかなる物体も存在しない)」はナンセンス (理解不可能) な言明だということになる。「物理的対象は存在しない」がナンセンスだとすると、ウィトゲンシュタインによればその否定である「物理的対象は存在する」もナンセンスである⁽¹¹⁾。従って、空虚な概念 (物理的対象が存在しない可能性) に反対してするムーアの証明 (物理的対象は存在する) は空虚だということになり、誤っている、と。

このような推論を行って、ストロールは、先の第35節の『物理的対象は存在する』はナンセンスである」という意味を説明する。

しかしストロールは、これとは別の観点からウィトゲンシュタインは、「物理的対象は存在する」はナンセンスであり、またその証明は誤っているが評価を与えている、と言う。

次に、ムーアの証明に対するウィトゲンシュタインの批判の第三、「ムーアの証明はナンセンスであり誤っているが、その背後には理解できる重要な考えがあるということ」について検討しよう。

(4) 第三、ムーアの証明はナンセンスであり誤っているが、その背後には理解できる重要な考えがあるということについて

ストロールはこのことを十分に評価するために、次の二つの問を立てる。

- i なぜムーアの言い回しがナンセンスで誤った仕方なのか
- ii 誤った仕方では表現しようとしているがその背後にある理解できる重要な考えとは何か

ストロールによれば、これらに対する答えは『OC』の第 54～59 節の中で示唆されている、と言う。まず、なぜムーアの言い回しがナンセンスで誤った仕方なのかという問を取り上げよう。

(4-1) なぜムーアの言い回しがナンセンスで誤った仕方なのかについて

ストロールは、『OC』の第 54～56 節を次の 9 つの文に再構成し⁽¹²⁾、第 35 節とは別の観点からムーアの証明の誤りが示されている、と言う。

- ① 誤りの蓋然性は、惑星の場合から手の場合へと次第に減っていくのではない。あるところで、誤りを考えることができなくなる。[[『OC』 §54 に対応]
- ② 「我々の周りの物はすべて存在しない」という仮説は、「物理的対象についての言明は例外なく誤っている」ということを含意する。
- ③ ②の仮説は、「我々は計算をする際に全て計算間違いをする」という仮説に類比的である。[[『OC』 §55 に対応]
- ④ しかし、③の仮説は考えられる仮説ではない。なぜなら、「しかじかの計算が間違いである」と言う為には、「ある計算が正しい計算である」ことが言えるのでなければならないからである。[[『OC』 §55, 56 に対応]
- ⑤ もし、全ての計算が間違っているのなら、ある計算が正しい計算だと言うことができない。
- ⑥ それ故に、「我々はあらゆる場合に計算間違いをする」という仮説はナンセンスである。同じ理由から「物理的対象についての言明は例外なく誤りうる」という言明はナンセンスである。

- ⑦ それ故、②～⑥から「物理的対象は存在しない」という言明はナンセンスである。従って、観念論をそれから導き出すことはできない。
- ⑧ 「物理的対象は存在しない」の否定は「物理的対象は存在する」である。しかし、もし p [=物理的対象は存在しない] がナンセンスであれば、非 p もナンセンスである⁽¹³⁾。それ故「物理的対象は存在する」はナンセンスである。
- ⑨ もし p [=物理的対象は存在する] が本質的に R [=私は p を知っている] に現れて、 R が「私は『物理的対象は存在する』ことを知っている」であるならば、 p がナンセンスなので R はナンセンスである。それ故、実在論を R から導き出すことはできない。

ここでの推論も、第 35 節に関してなされた 3(3)での推論と同様に、「物理的対象は存在する」はナンセンスであるということが導かれている。なお 3(3)では、「物理的対象は存在しない」は経験的に空虚な概念なのでナンセンスであり、その否定の「物理的対象は存在する」もナンセンスである、というものであった。しかしここでの推論は、「あらゆる場合に計算間違いをする」ことがナンセンスであることに類比的に「物理的対象は存在しない」はナンセンスであり、従ってその否定の「物理的対象は存在する」もナンセンスであるというもので、3(3)における推論と違って文法的（論理的）な意味で言われている。

またここではさらに、「物理的対象は存在しない」とか「物理的対象は存在する」はナンセンスなので、このことから観念論も実在論も導き出すことができないと言われている。しかしウィトゲンシュタインは、「物理的対象は存在する」はナンセンスだと言うだけでは観念論者や実在論者に対する十分な答えにならないということを認めている⁽¹⁴⁾。

では、ウィトゲンシュタインはどう答えようとしているのか。

先の再構成において、有意味な（理解可能な）答えがありうるためには、一つでも正しい計算がなければならぬ（上記④）、即ち、物理的対象が少なくとも一つは存在するのでなければならなかった。ムーアにあってはそれが「ここに私の手がある（存在する）」というものであった。

しかし、とストロールは続ける。懐疑論者は、この計算が正しいことを如何にして

我々は知るのか、即ち「ここに私の手がある」ということを如何にして証明するのかと問うのだ、と。

これに対して、ストロールは、ここで問われている二つの「疑い」の種類の違いに言及する。3(2)における第20節の解釈では、ウィトゲンシュタインは「惑星の場合」の誤りと「手の場合」の誤りとの違いは程度の違いであることを示唆していた。しかし、第54節では、「あるところで、誤りを考えることができなくなる」とされており、それは程度の違いではなくて、種類の違いが言われている、と言う。

計算が全て誤っていると、物理的対象についてのあらゆる言明が誤っているという言明はナンセンス（理解不可能）である（上記⑥）。そして、全ての計算は誤っているのではないかと問うこととこの計算は誤っているのではないかと問うことは疑いの種類が違う。これに類比的に、物理的対象についてのあらゆる説明が誤っているのではないかと問うこととしかじかの惑星が存在するかと問うこととは疑いの種類が違う、と。

このように、懐疑論者が疑いと呼ぶものは理解可能な疑いではない。それは疑いに関連し、疑いを模倣する行為ではあるが、重要な点で通常の（日常的な）疑いと異なっている。「通常の疑い」と懐疑論者のするこの種の「哲学的な疑い」の違いは、度合いの違いではなくて、種類の違いなのである。そして、「哲学的な疑い」は理解可能な疑いではなく、ナンセンスな疑いなのだと言っている、と言うのである。

第54節で言われるように、惑星の場合から手の場合へと誤りの蓋然性が次第に減っていくのではない。ある点で誤りが考えられなくなる（誤りを疑うことが意味をなさなくなる）のである。

ストロールは、この疑いの種類の違いを洞察したのがウィトゲンシュタインだと言うのである。

しかしながらムーアは、自分の証明によってウィトゲンシュタインとは対照的に、自分の手の存在を含めて「あらゆる事物の存在を疑う問い」は理解できる問いであることを前提にして、「私は……を知っている」と言うことで答えを与えたつもりでいる。もちろん、「私は……を知っている」と答えることが適切な場合の疑いもある。

通常の言語ゲームにおいて意味をなす疑いは全てこれに該当する。しかし、ムーアが理解できると考えているその問いの前提にある「あらゆる事物の存在を疑う問い」は、理解できない(ナンセンスな)問いである。そのため、その証明は誤り導かれており、ムーアの証明は不必要だということになる。

では、ストロールが言う、ii の、誤った仕方では表現しようとしているがその背後にある理解できる重要な考えがあると言う時のその重要な考えとは何だろうか。次に、それを検討しよう。

(4-2) ムーアの証明の背後にある理解できる重要な考えについて

ここで重要となる概念は次の『OC』の第 56～59 節にあるとストロールは言う。

疑いは、次第にその意味を失う。この言語ゲームは、正にそのようなものである。

そして、言語ゲームを記述するものは全て論理学に属する。(『OC』 §56)

さて、「ここに私の手があることを私は知っている、単に推測しているのではない」は、文法的命題として考えられうるのではないか。それ故、それは時間的ではない。(『OC』 §57)

「私は何々を知っている」が文法的命題として解されるならば、「私」はもちろん重要であり得ない。そしてそれは、本当は「この場合疑う余地はない」とか『私は知らない』という言葉がこの場合意味をなさないことを意味する。そしてもちろん、「私は知っている」も意味をなさないことになる。(『OC』 §58)

「私は知っている」は、ここでは論理的洞察である。ただし、それによって、实在論は証明されない。(『OC』 §59)

ここに表れている重要な概念は、第 56 節の「疑いは、次第にその意味を失う。この[疑いの]言語ゲームは正にそのようなものである」というものだ。これは、ムーアがその反対論者達から「ここに私の手がある」こと自体の証明を求められ、それに対して「私はどのようにして証明すべきなのか。私にはそれはできないが、私は『ここに私の手があること』を知っている」と答えることに関連している。懐疑論者達は、

ムーアの「ここに私の手がある」こと自体を疑い、ムーアにその証明を求め、ムーアはそれに対して「私は知っている」と誤って答えたのである。

ストロールは、ウィトゲンシュタインはここに、ムーアによって洗練された形で表された伝統的哲学の本質⁽¹⁵⁾に対する異議を見出した、というのである。

それは、懐疑論者の疑いに答えるどのような試みも誤りに導かれるという洞察である。ウィトゲンシュタインは、ムーアは我々の実際の実践を描いてはいない、と考える。我々が日々の生活の中で行っている通常の言語ゲームでは、疑いはどこかで打ち止めになる（それ以上疑う意味がなくなる）。しかし、観念論者や懐疑論者が目論んでいるのは終ることの無い疑いのゲームである。ムーアが理解しているように、疑いをなぜ無限に続けることができないのか、また続けるべきではないのかということに、理由はない。しかし、通常の言語ゲームでは疑いはどこかで終る。これは一つの洞察である。「疑いは、次第にその意味を失う。この〔疑いの〕言語ゲームは正にそのようなものである」ということが、ウィトゲンシュタインの洞察である。

ストロールによれば、ムーアはこのことを理解していなかった。ムーアは、「疑いは、次第にその意味を失う」という洞察に至ることは決して無かった。そのため、彼は、観念論者や懐疑論者による「通常の疑いを超えた疑い」も理解できるものと考えていた。しかし、ムーアの意図は、そのような終わりの無いように見える疑いの連鎖を断ち切ることだった。その疑いの連鎖を証明によって断ち切ることができなかったので、代わって「私は知っている」でもって答えようとしたのだ。ムーアは結局、懐疑論者の問う「哲学的な疑い」と日常的な「通常の疑い」の論理的（文法的）な違いを見て取れなかったのである。

しかし同時に、ウィトゲンシュタインは、ムーアの定式化の背後にムーアが手に入れようとしてはっきりと述べることのできなかつた、理解できる何か重要な考え（文法的命題としての意味）を見出した。それは、「疑う」という語は普遍的に適用されることはなく、疑いのゲーム自体確実性を前提にしており、疑いが成り立つためには疑いが排除されているものがあるというものである。

全てを疑おうとする者は、疑うところまで行き着くこともできないだろう。疑

いのゲーム自体、確実性を前提にしている。(『OC』 §115)

「ここに私の手がある」という言明には疑いが排除されている、ということについてはウイトゲンシュタインも同意する。しかし、ムーアとウイトゲンシュタインとは、その点を表現する仕方が違っている。ムーアは、「自分はそれ（ここに私の手があること）を真であると知っている」と主張することによって、疑いの連鎖を止めようとした。他方ウイトゲンシュタインは、「私はそれを知っている」という言い回しも「私はそれを疑う」という言い回しも、ムーアがそれを言明するような状況（通常の言語ゲームとは無関係な状況）では意味をなさず、そこで使われている「知っている」や「疑う」という言葉の誤用であって、ナンセンスだ、と言う。ムーアが語っているような状況で、ムーアのような言い回しをすることに制限を与えているものが通常の言語ゲームであり、ムーアの言い回しは、通常の言語ゲームではナンセンスだ、と。

通常の言語ゲームには、それを根拠付けている「揺るぎないもの」がある。その「揺るぎないもの」とは、疑いが排除されているもののことである。言語ゲームにおける通常の疑いや知識は、この「揺るぎないもの（確実さ）」を根拠としている⁽¹⁶⁾。「ここに私の手がある」もその「揺るぎないもの」の一つである。

しかし、この「揺るぎないもの」は「文法的命題として考えうるのではないか」(『OC』 §57)、というのはどういう意味だろうか。

ウイトゲンシュタインにとって真なる命題とは自然科学の命題⁽¹⁷⁾（経験命題）であり、かれは、経験命題と文法的命題を対比して用いる。経験命題は、その命題の検証や正当化を問うことに意味のある命題のことであるが、文法的命題は、語の用法（使用規則）や言語ゲームを記述するもの(『OC』 §56, 『Z』 §590)で、検証や正当化を問うことは的外れなものになる。

さて、我々の生活の中では、疑うには疑うだけの理由がある。そして疑いはどこかで打ち止めになる。ムーアが「擁護」で取り上げている命題は、誰もが疑うことのないものばかりである⁽¹⁸⁾。ウイトゲンシュタインは、それらは我々の通常の言語ゲームの中で特有の論理的役割を演じている命題だと言う。

ムーアが、自分はしかじかのことを知っていると言う時、彼は実際に、我々が特別なテストをすることなく肯定する経験命題だけを数え上げる。つまり、それは我々の経験命題の体系の中で、特有の論理的役割を演じている命題なのである。(『OC』 §136)

「物理的対象は存在する」とか「我々には手が二つある」や、ムーアが自分は知っていると言って掲げる命題は、いずれも「揺るぎないもの」として通常の言語ゲームの根拠としてあり、規則のような役割を果たしている。それらは、経験命題の装いをしているが文法的命題としての役割を担っているのである。これが、言語ゲームの中で「特有の論理的役割を演じている」と言われるところのものであり、第57節においてウィトゲンシュタインが「文法的命題として解されうるのではないか」と言う意味であり、洞察である。

この「特有の論理的役割を演じている」ものは、我々の日常の行動を条件付けているものなのである。

以上が、ストロールの解釈を下敷きにして考察した、ムーアに対するウィトゲンシュタインの批判と評価である。

4 最後に

「我々には手が二つある」ことは、我々の日常生活の中で疑われることのないものの一つである。しかしその疑われなさは、それを「知っている」と言明することで表現されるものではない。それは通常の言語ゲームで蝶番として働き、その揺るぎなさは日常生活の行為において示されているのである。

…言語ゲームの根底にあるのは、我々の行為である。(『OC』 §204)

この行為において示されている「揺るぎないもの」を文脈(通常の言語ゲーム)と関係なしにあえて言葉にして表現すると、それはナンセンスな(意味をなさない)言明になる。それは「表現できないものを表現しようとする誤った試み」(『OC』 §37)

なのである。

この論理から、「物理的対象は存在する」と言明することがナンセンスな理由が、3(3)や(4-1)で示されたものとは違った、新たな観点で理解される。3(3)では、「物理的対象は存在しない」は経験的に空虚な概念なのでナンセンスであり、その否定の「物理的対象は存在する」もナンセンスであった。また、3(4-1)では、「あらゆる場合に計算間違いをする」は文法的（論理的）な意味でナンセンスであるのと類比的に「物理的対象は存在しない」はナンセンスであり、その否定の「物理的対象は存在する」もナンセンスであった。

この新たな観点からは、「物理的対象は存在する」と言明することがナンセンスになる。「物理的対象が存在する」ことの疑われなさ（確実さ＝揺るぎなさ）は、我々の日常生活の行為の中で示されているものである。「私が何の疑いもなくタオルをつかむ」（『OC』§510）ことの内に、手とタオルの存在の揺るぎなさが示されているように、である。

「物理的対象は存在する」は、通常の言語ゲームにおいて特有の論理的役割（文法的命題の役割）を果たしているのである。従って、「物理的対象は存在する」ことを文脈と関係なくあえて取り上げて言明することは、意味をなさないのである。

通常の言語ゲームの根底にある揺るぎないものは、我々がそれを確信したから持っているのではない。またそれは、その正しさを納得したからとか納得しているからでもない。それは受け継いだ背景であり、それによって真偽を区別するのである⁽¹⁹⁾。それらの中には行為の内に現れていても意識に上らないものさえある。ウィトゲンシュタインは、ムーアの二つの論文から思索を進めてこうした洞察を得た。それを『確実性について』の中に綴っていったのである。

注

(1) 『OC』の序言による。

(2) Moore, GE.(1959), P129～137

(3) Moore, GE.(1959), P146、[] 書きは論者の挿入による。以下同じ。

(4) Moore, GE.(1959), P148～150

- (5) 『OC』からの引用は邦訳の『確実性の問題』を参考にして訳出した。以下同じ。
- (6) Stroll, A. (1994), P97~118
- (7) Moore, G.E.(1959), P33
- (8) Stroll, A. (1994), P101
- (9) 天王星は 1781 年に発見され、惑星「バルカン」は 1915 年のアインシュタインの一般相対性理論によって、その存在の可能性が否定された。
- (10) Stroll, A. (1994), P102
- (11) ウィトゲンシュタインによれば、ナンセンスの否定はナンセンスである。
(Wittgenstein in Cambridge, (2012)P158) なお、『OC』§58 でも同様の推論がみられる。
- (12) Stroll, A. (1994), P109、ストロールは、ここで再構成した文はウィトゲンシュタインの『OC』における文と同一のものではなく、『OC』から大きく逸脱しているところもあることを注意している。なお、①～⑨中の [] 書きは論者の挿入である。
- (13) 注の 11 を参照
- (14) 『OC』 §37
- (15) ここでいう伝統的な哲学の本質とは、デカルトに始まって、ロック、バークリー、ヒューム、カント、そして 20 世紀前半のラッセル、エイヤーらの研究にいたる認識論的伝統の観念論、懐疑論、実在論の枠組みのことである。(Stroll, A. (1994), P97~101)
- (16) このことをウィトゲンシュタインは、『知識』と『確実さ』は異なるカテゴリーに属する(『OC』 §304) と表現する。
- (17) 『TLP』 4.11。なおストロールは、この 4.11 の意味でいう真なる命題を「経験命題」と表現してきたと言っている。(Stroll, A. (1994), P115)
- (18) 『OC』 §84、93。なお、ムーアが「擁護」でとりあげている命題は 3(1)を参照。
- (19) 『OC』 §94

参考文献

- 『OC』 Wittgenstein, Ludwig, *On Certainty*. G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright (eds). Trans.G.E.M.Anscombe. Basil Blackwell Oxford, 1979 (邦訳『確実性について』ウィトゲンシュタイン全集 9、大修館書店)

- 2 『Z』 _____ *Zettel*. G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright (eds). Trans.D. PaulandG.E.M.Anscombe. Basil Blackwell Oxford, 1981 (邦訳『断片』ウイトゲンシュタイン全集 9、大修館書店)
- 3 『TLP』 _____ *Tractatus Logico-Philosophicus* . Trans.C.K. Ogden,(1922) Routledge,Rep.1992 (邦訳『論理哲学論考』ウイトゲンシュタイン全集 1、大修館書店)
- 4 Moore, G.E.(1925) 'A Defence of Common Sense' in Moore, (1959),32-59
 — (1939) 'Proof of an External World' in Moore, (1959),127-150
 — (1959) *Philosophical Papers*(Geoge Allen and Unwin, The Macmillan Company)
- 5 Moyal-Sharrock ,D.(2007) *Understanding Wittgenstein's On Certainty* (Palgrave,2007)
- 6 Stroll, A.(1994) *Moore and Wittgentein on Certainty* (Oxford,1994)
- 7 *Wittgenstein in Cambridge*, Brian Mcguinness, (ed). (Wiley—Blackwell,2012)